

子どもと造形文化

Child and Formative Culture

丁 熙娟

JUNG Heui Yeon

<はじめに>

近代化が進んで、子どもの遊びも、だんだん変わっている。一昔前には都会の中でも空き地や雑木林などがあり、自然の中から学ぶ遊びも多くあり、屋外でも安心して遊べる環境が残されていた。しかし、空き地は宅地になり、地面がアスファルトに覆われ、車が増えることによって、危険で屋外で遊べなくなってしまった。それとともに、学歴社会の影響で、塾通いや稽古事などで、大忙しの生活を過ごしている子どもも大変多い。

韓国では子どもに対して、子どもは、これからこの社会を背負っていく「夢の木」である、という言い方をします。私たちは、この夢の木を大きく育てなければなりません。だが最近、日本のテレビなどマスメディアでは、子どもが関わっている、さまざまな事件や、学校内のいじめ、ひきこもっている子どものニュースなども多い。けれども、これからは、韓国でも子どもの問題が増えていくのではないかと思います。

こういった事実をふまえて、我々大人が考えなければならぬことは、どうすれば現在の子ども達を、明るくのびのびと育てられるか、とゆうことである。

外で自然に触れる機会が少なくなっても、子どもが安心して、心豊かにまた、思考力、想像力、創造力、判断力など、子どもの内面を刺激し、心を揺さぶる活動する事が、きわめて重要である。

このように子どもにふさわしい豊かな心を持たせたい。

ここで考えられるひとつの方法として、造形教育があることを強調したい。子どもが、私たちの周りにあふれている色々な物を見て、どのように考えているか、例えば使えなくなった、ペットボトルを見てこれは飲み終わったからといって捨てるのか、それとも「なにかできるものがないか」を考えさせることによって、限りない創造力を伸ばすことができと思う。いろいろな立場から、子どもたちと実際に研究してみたいと思う。

また、子どもが造形活動によって得られる、身体ならびに精神、情緒的な発達とのかかわりから、何を得られるかを理論的に確かめていきたいと思う。

＜研究方法＞

- 児童館のアトリエ時間を見学し、子どもたちの造形活動。

H 児童館では夏休みに、特別企画で学年に分けて工作時間を開いた。私は低学年（1年生～3年生）の工作時間を見学させていただき観察をした。

この低学年の時間に用意されたものは、木のこぎり、釘、ハンマーで、自由工作であった。男の子より女の子の方が多かったし、学年の方も一年生に見えることが多く見られた。私はこの時間にこの幼い子どもたちがほとんど触ったこともなさそうな木のこぎりなどをどんな表情で接して行くだろうかを観察するつもりだ。

- 2人の対象児の造形活動を通して、その楽しさと教育的意味を探る。

子どもたちと一緒に私たちの身の回りにある素材で造形を行う。

時間は1時間から1時間半を見通す。

一回目 ー 子どもの自由創作にする。

2回目 ー 紙などを利用して折り方、きり方を教え、子どもたちがとこまで出来るかを研究し、ここで子どもたちの発想などを観察する。

3回目 ー ペットボトルや布地、紙粘土、針、糸などを利用して人形を作る。

第1章 造形の役割

第1節 造形の特徴

“造形”とは、一般的に平面や空間に、形のある一定の秩序を造り出すことである。つまり、色や造形材料を使って、ある目的にかなった意味や価値を生み出すことで、絵画・彫刻・工芸・デザイン・建築・庭園などに広く応用さ

れる。子ども達の教育の場においては、砂場遊び・積み木遊び・描画活動・折り紙・粘土遊び・集団遊びや、いろいろな物の製作や組み立てなども広い意味で造形活動といっていよう。

「造形」という言葉は「製作」という観念よりも、もっと基本的で広い内容を含んでおり、幼児期の特性から考えても、遊びにより新しい造形の発見は、より望ましいものといえる。

造り出す喜びは、子どもにとって、色々の場があり、いろいろの質がある。作品が出来上がった時の喜び、あるいは、計画・構想段階で、考え、工夫、イメージをまとめる充実した気持ち、表現の過程でいろいろの抵抗を乗り越え、目的に向かってしだいに完成に近づく楽しさ、そして出来上がった作品を自分も認め、友達や先生にも褒められたときの喜び、このような表現の喜びを十分に味わうことが、図画工作科のねらいである。

第2節 造形の影響

造形的な創造活動は、人間の情念の世界に結びつき、最も自己表現的な行動である。発想から表現過程において、構成の発現や自由を認め、他の教科や領域の如く、条件や束縛を受けることが少ない。しかも、手や体を通しての具体的な活動であるだけに、子ども達の行動的欲求を大きく満足させることができる。

どの子どもも、意欲的に、興味をもって参加し、積極的に創造活動を刺激し、創造への基礎を育てる中核的、本質的な役割を果たすものである。子どもたちが自由に、のびのびと自己表現できることは、創造本能を満足させ、創造への喜びと自信を深めて、創造活動への構えや基礎を育成するものである。

第3節 造形の効果

生活の中でものもののかかわりは、造形表現の基盤になっている。造形的な経験は、子どもたちの手と、土や紙、その他もろもろの材料と

の出会いから始まる。それは、たとえ、ものを造るところまでいなくても、どろんこ遊びの中で土と水の性質を知り、木の枝を折ったり曲げたり、紙をまるめたり破ったりする経験の中で、木や紙やその他の材料の性質を体得する。

子どもたちの遊びの中では、一片の木ぎれは、たちまち家になったり、自動車になったりする。そして、かれらの要求の高まりにともなって、木ぎれを並べたり、重ねたり積み上げたりする。これらの造形的な経験は、いずれも加工技術の基礎になるものといえよう。また1本の棒きれは、手の延長としての道具の役割もする。叩く、掘る、突くの作業を通して、子どもの造形的表現もしたいに内容を高めてくる。これらの造形的な体験が豊かであることは、とりもなおさず、造形学習の基礎が育っていることになる。

遊びの中で、こうしたい、こうありたいという要求や願いは、しばしば造形表現の中で生かされる。それらの要求が、外からの制約を受けることなく自然に引き出されるほど、活発な造形活動が期待できる。まず現実の遊びの中に子どもたちを引き戻し、その中で、遊びへの夢を託してイメージの展開を図りたい。子どもたちは、自分たちの遊びなれた人形には満足しないで、洋服を変えたり、顔の表現を変えたり、髪の毛の長さを短くしたり、長く伸ばしたり、かれらの夢は限りなく広がり、様々な人形を作り出す。遊びの中での根強い要求を、造形表現での要求に置き換えて行くのである。

第2章 造形遊びの衰退

全体として衰えをみせている子どもの遊びの諸分野の中で、衰退が最もはなはだしいのは、作り遊び（工作遊び）である。

いわゆる「高度成長」時代（1960年代）以前の子供たちは、「肥後の守」という汎用ナイフを携帯し、木や竹などを加工して、多様な遊び玩具を作って遊んだ。「高度成長」時代に入って、商品玩具が溢れるようになるとともに、子どもがナイフをもつことは危険だからという考

えが広められ、「肥後の守」は子どもから取り上げられてしまった。

現在の大学生は、ちょうどこの「高度成長」時代の只中に生まれ育った世代である。私の身近な大学生の中にも、竹トンボのような代表的遊び玩具を自分で作った経験のない学生は少なくない。

鉛筆はともかく、竹をナイフで削るとなると、ものすごく難儀する。

竹とんぼを飛ばす要領もよくわからない。素早く回転させれば、舞いあがる物を、上に放りあげようとする意識が強くはたらき投げ上げてしまう。

現在の子どもたちは、作る遊びの経験はもっと少なく、無器用さはもっと進行している。中学生でも、製図に使う鉛筆を「マッターホルン」のような形にしか削れない者が少なくない。

ピアジェは、造る遊びを「構成的遊び」とよび、これは遊びから労働（外界の適応活動）への過度的形態と性格づけている。

作る遊びは、モノ（自然）にはたらきかけることによって、モノ（自然）から教えられ、モノ（自然）から制約をうける。モノの性質に従わなければならない。自然の法則性に適応しながら、「頭」と「手」を結びつけて理にかなった仕方で作業しなければならない。ねばり強く活動しなければ目的を達することができない。

造る遊びは、一般的なごっこ遊びのように、いつでも中断できる性質の遊びではない。このような性質を持つ工作遊びの中で子どもは認識能力の土台をふとらせ、集中力や持続する意志忍耐力といった貴重な人間的性質・資質を自然に自発的に身に付けることができるのである。今日の子どもたちに、このような機会が極端に少なくなっていることは、まことに不幸なことである。

<造形遊び>

造形とは文字通り形を造ることである。こ

のことはあらゆる人間生活に関連があるが、大きく分けて美術と技術になる。幼児の造形はやがて図形工作・技術・美術工芸に発展する基礎となるものである。幼児の造形は遊びの形をとるが、その意義は次のように考えられる。

- (1) 知識の発展 : 手は第2の脳だといわれる。手をはじめ、五感を通して、幼児の知能は発展していく。
- (2) 美意識を育てる : 真・善・美といわれるが、この中で幼児にもっとも早く芽生えるのは美の意識である。幼年時代に得た美意識は生涯の宝となる。
- (3) 自我を育てる : 造形遊びは、表現活動であるから、そこには、必ず自己表現や自己主張が出てくる。このことが個性の形成につながっていく。
- (4) 技術の基礎を養う : いろいろな材料にふれ、これに手を加えることによって、物質に対する理解を深め、技術的な態度の基をつくることができる。
- (5) コミュニケーション : 造形遊びは集団で行われることが多い。ここで子どもどうしの、コミュニケーションが行われ、社会性に役に立つ。

以上の他にも、集中力の養成とか装飾本能の満足とか、いろいろ考えられるが、要は人間形成の根になるようなものが、造形遊びにはたく

さんあるということである。

造形遊びはきわめて多いが、それぞれの活動はどのような目標で、どのような系統に属するかということを整理して、指導計画をたてることが大切である。造形の分類について次のようにのべよう。

- (1) 全身的な活動と手を主とした活動 : 砂遊びなどは前者、絵などは後者である。低年齢ほど全身的な表現活動が望ましい。
- (2) 視覚的な活動と触覚的な活動 : 絵や模様などは前者であり、素材を扱うのは後者である。どちらも大切である。
- (3) 平面的な表現と立体的な表現 : 絵や模様は平面的なもので、粘土遊びや積み木は後者である。
- (4) 然材料と人工材料 : 農山村と都会では、その材料の入手が対照的である。都会でもできるだけ自然物を取り入れ、農山村では人工材料にも親しませたい。どちらかといえば自然材料のほうが入手しにくい。
- (5) 個人表現と集団表現 : どちらも大切である。
- (6) 自己表現と適応表現 : 絵や粘土遊びでは、自分自身を表現するが、部屋の飾りなどは目的がある活動で、これは適応性が求められる。主観的な表現と客観的表現といってもいいわけである。

以上のように、造形遊びにもさまざまな分類ができる。

<創造性>

創造性とは、「ある目的達成または新しい場面の問題解決に適したアイデアを生み出し、ある社会的、文化的または個人的に新しい価値あるものを創り出す能力、及びそれを、基礎づける人格特性である」とされている。つまり、新しい価値があるもの、あるいはアイデアを造り出す能力（創造力）、およびそれを基礎付ける人格特性（創造的人格）である。

このように創造性は、人の能力と人格特性との2面からとらえることができる。創造性を創造力とみた場合、それには創造的思考と創造的技能とが含まれているためにそうした機能が働いて、多くの新しいイメージやアイデアの芽が生じ、また創造的な表現力が生まれる。

また、創造性を創造的人格としてみると、創造的人格は創造的態度としてとらえられる。この創造的態度は、創造的人格の特性を分析することによって究明されるが、ギルフォード（Guilford, J.P.）は因子分析によって次の6つの創造性因子を確認している。

- ① 問題への感受性 — 問題点や改良すべきところを敏感に読み問う能力
- ② 流暢性 — 多くのアイデアを生み出すことができる能力
- ③ 柔軟性 — 問題解決の際に、特定の

解決方法にこだわらずに、多方面にわたって解決方法を求めるような思考の能力

- ④ 独創性 — 一般の人々とは異なる非凡な反応を生じる能力
- ⑤ 綿密性 — 諸条件を思慮しながら計画を作る能力
- ⑥ 再定義 — 御念を頭の中で分解したあとで、再構成する能力

(表現活動と創造性)

心のうちにあるものを何かの手段や媒体を通して外へ表出する活動が表現活動である。新しい玩具を手にうれしそうに部屋中をかける幼児の働きは、身体運動による表現であるが、もっと間接的にある媒体を使った表現活動に言語による表現、音による表現、造形・描画による表現がある。これらを通して創造性がつちかわれる。

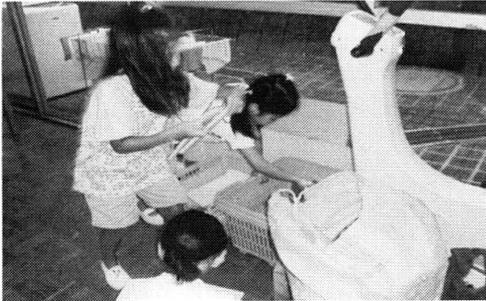
第3章 造形の実験

第1節 児童館

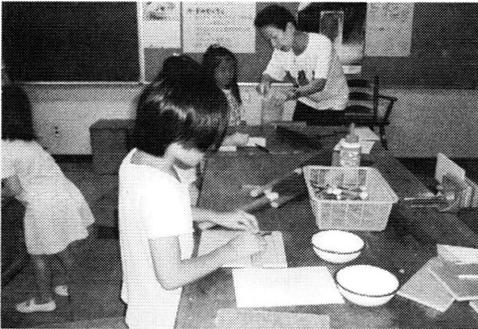
夏休みに特別に企画されている、児童館の作業時間を見学させていただき観察をした。

- 時間 ; 13:30 ~ 16:00 (2時間半)
- 対象 ; 低学年 (1年生~3年生)
- 男の子 ; 5名 女の子 ; 8名
- 主題 ; 自由工作
- 材料 ; 木、のこぎり、釘、ハンマー

進み方 ; 最初、先生からの工具の使い方の説明が始まる。のこぎりのように危険性があるものに対する説明が 20 分ぐらいあった。それから子どもに最初下絵を描かせてから自由に造らせる。



ア. 自分が設計をした物に対して材料を探している子ども達



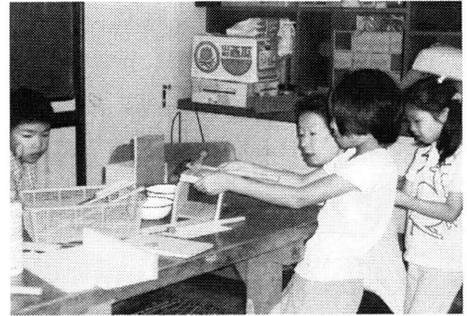
イ. 選んだ材料に描いた設計図を見て本格的に造り始めている子ども達



ウ. 小学3年生の男の子。真剣に、のこぎりを動かしている。



エ. 小学1年生の女の子。初めてのこぎりを使うといっているのに全然怖がらず木を切っている。



オ. 先生から説明を聞き、釘を打っている女の子。



カ. の友達に気をつかってじゃまをしないように下の面で製作をしている子。

<観察>

2時間ぐらい子ども達を手伝いながら観察をした。子ども達が設計を、終わってから、材料を取

ってのこぎりや、釘を少しも、迷う事もなく手際よく使える事を見てびっくりした。何よりも小さい小学校1年生の女の子が、まったく道具を怖がる様子も無く、のこぎりをすぐに持ち、切り始めた。私はそれを見て、怪我でもしたらどうするのだろうと、心配だった。

<会話>

私 ; へえ、怖くないの？

一年生の女の子 ; 怖くないよ…

私 ; のこぎりを使ったことがあるの？

一年生の女の子 ; 初めてなの！

私 ; すごいね…お姉さんが動かないように、木をちゃんと持ってあげようか？

一年生の女の子 ; はい

力があんまりなかったので安定ができなかった。それで私が動かないようにネジをしっかり止めてあげた。

女の子はすぐありがとうってお礼を言った。自分の力で切った木を、自分が設計をした紙を見ながら、釘を打ち始めた。

<感想>

このプログラムに参加したのは、小学校1年生から3年生までの子どもが全部で13人だった。驚いたのはどの子どもでも、自分の造りたい物の設計図を描く事ができて、それに基づいて製作に掛かれたことである。

全員自分の造りたいものが違っていたが、どの子も大変上手にできあがった。あらかじめ指導の先生は、道具の使い方だけを教えて、造るものは個人個人に任せて造らせたのだが、子どもたちの自由な発想力、想像力と製作に熱中して造り上げた作品の出来のよさにも驚かされた。

第2節 私のプログラムで行った実験

全章で述べた事柄にもとづいて、実際に造形活動を知り合いの子どもでも実験してみた。

<一回目>

人数 - 2名

小学2年生 女の子 (7歳)

小学4年生 女の子 (9歳)

最初の日

用意しておいた材料

紙粘土、ペットボトル、ダンボール、色紙、木、はさみ、のこぎり、のり、毛糸など

まず種々な材料を用意しておいて自由工作をやらせた。

二人とも用意してあった材料の中から自分の好きなものを選んで触り始めた。

二人とも迷う様子も見せず、選んだ材料で作りを始めた。

<会話>

もえちゃん ; 何をつくりましょうか？

私 ; 自分の好きなものでいいよ。気楽に遊ぼうね！

めみちゃん ; ええ、本当に何でもいいの？

私 ; そう、何でもいいよ

二人は自分で選んだ材料を使って作り始めた。

めみちゃん ; このはさみは普通のハサミと違うね…

私 ; 形がちょっと違うでしょう、ペットボトルを切るハサミだよ。

めみちゃん ; こんなハサミ始めて見た。

もえちゃんは、私と初対面だったのであまり話さなかった。もえちゃんは、紙粘土を取り出していじり始めた。めみちゃんは、ペットボトル用ハサミを使ってみたいような感じで、すぐペットボトルを取り出し切り始めた。

私 ; めみちゃんは何を作っているの？

めみちゃん ; 秘密なの…

私 ; もえちゃんは何？

もえちゃん ; ……。

もえちゃんは首をかしげている。たぶん恥ずかしいのではないのだろうか。

私がそばにしていると気にすると思って少し離れたところから様子を見た。

私は離れてみて、二人が作っているのを見ると、二人は作るのに夢中になって二人の間には何の会話もなかった。

40分くらい経つとめみちゃんが、できたよって叫んだ。

私 ; かわいい、面白い人形だね。

めみちゃん ; 名前もあるの？

私 ; 名前は何？

めみちゃん ; ぼりちゃんなの。

私 ; 名前がおもしろいね。もえちゃんは何？

もえちゃん ; ……。

また首をかしげる。

私 ; ああ…これはかわいい池だね…これは金魚さん？

もえちゃん ; はい。

私 ; もえちゃんすごいね。こんなに小さくよく作ったね。今度色も塗ろうね！

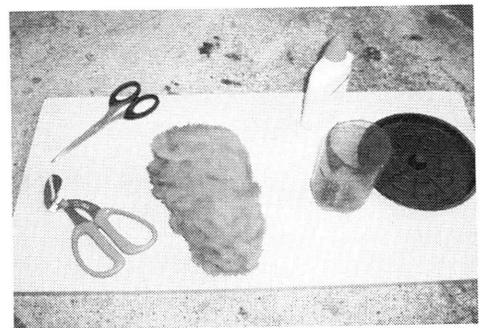
もえちゃん ; はい。

私 ; 今日はもう遅くなったから今度またいろいろ作ろうね。

めみちゃん・もえちゃん ; はい、またやろうね～

初日だったので3人も緊張していたが造形遊びが進むにつれてたんだん打ち解けていく過程がみられた。

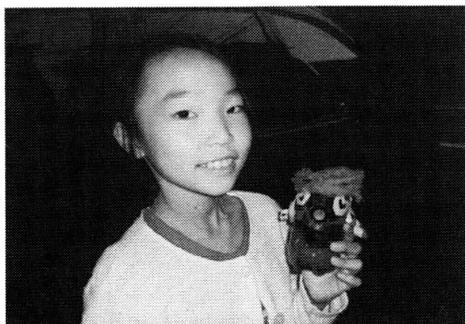
<材料>



ア、めみちゃんが選んだ材料

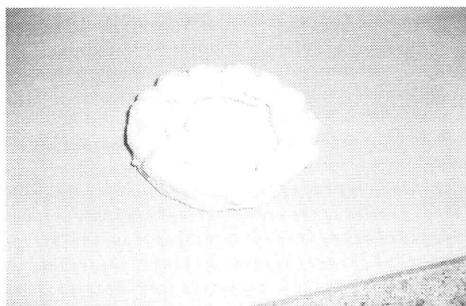


イ、非常に集中して人形を造っているめみちゃん



ウ、だいたいイメージとおりの人形が造れたので大変満足している。

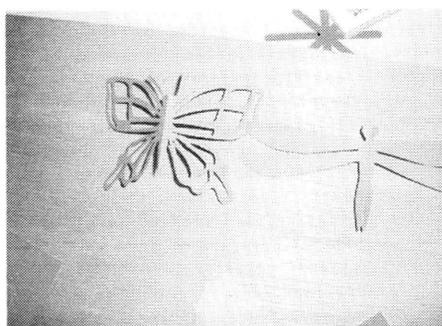
もえちゃんが紙粘土で造った池



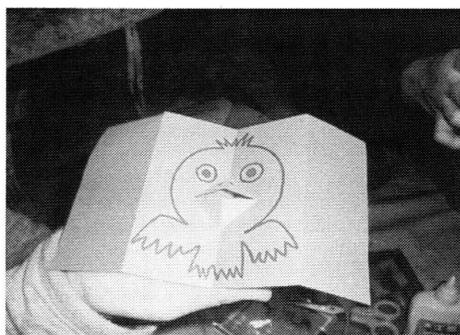
ア、思ったより上手に作れたので驚いた。

あらかじめ造っておいた見本をみせて、造り方をあらかじめ教えておき、どれだけ同じように造れるか。

また、自分の考えをどれだけ加えることができるか、観察してみた。



(用意した見本1)



(用意した見本2)

<造形遊びの観察>

めみちゃんと、もえちゃんはかなり違う点があった。

めみちゃんは、毛糸を使ったり、色紙を使ったり、材料の使い方が豊かだった。けれども、もえちゃんは、まだ2年生だからか、紙粘土だけを利用して違う材料には、目もくれなかった。ここで私は考えたが、きっともえちゃんが一番気に入って、使ったことがあるのが紙粘土だからではないかと思った。

<2回目>

紙工作

最初に簡単な紙細工を教えた。半分に折って動物の口にしてみた。

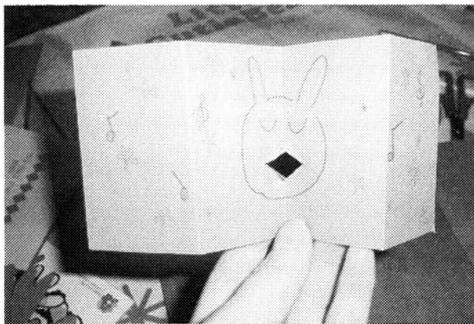
私 ; どう? お姉さんが作ったこのアヒルさんどう? かわいい?

めみちゃん・もえちゃん ; とても、かわいい...

私 ; こういう折り方、できるかな! やってみよう!

めみちゃん・もえちゃん ; はい。

<めみちちゃんの作品>



ア、めみちちゃんはそのままだ、見本の通りに作ることができた。

めみちちゃんは、すぐ色紙を出して同じ大きさに切り折り始めた。

私 ; 同じではなくてもいいよ。好きに折ったり何違うものを描いてもいいよ…

めみちちゃん ; はい。

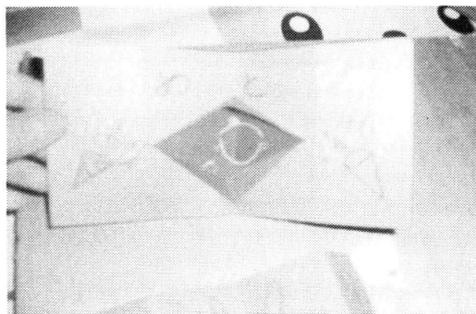
めみちちゃんは色鉛筆で何か描いたりしながら満足した表情を見せた。そこで私が質問をした。

私 ; めみちちゃん… お姉さんはめみちちゃんが造ったのを見て何か違うものも造れる気がするんだけどめみちちゃんはどう思う？

めみちちゃんは首をかしげながら考えていた。

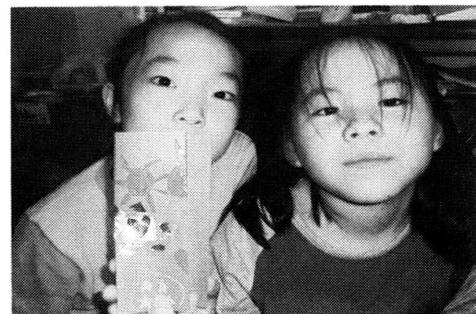
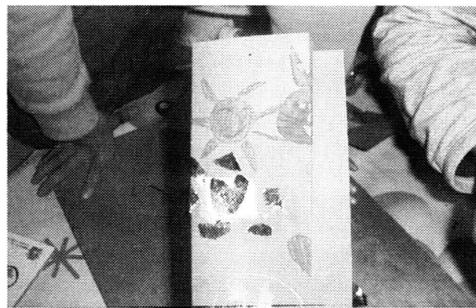
めみちちゃん ; ええ！… カードにしようかな…お母さんにお誕生日カード…

私 ; いいね…きつとお母さん手造りカードをもらったら喜ぶよね！



イ、めみちちゃんが創ったお母さんへの誕生日カード

<もえちゃんの作品>



もえちゃんもお母さんへのカードを創った。

2人で記念に…

もえちゃんは、まだ年齢が低いいためか、めみちちゃんのような折り方ができなかった。私が紙

を半分に折ってウサギの顔を半分に描いてそれをはさみで切って開き、残りの半分に目と鼻、口を描いたら、そのウサギの絵をそのまま写し色紙を折って貼った。
これでもえちゃんもカードがなんとか造れた。

(紙細工の観察)

めみちゃんは少しアドバイスをする、見本の作品に自分の考えを付け加えてオリジナルの作品を作ることができた。もえちゃんは、年齢が低いので自分のイメージを形にする事が難しかった。

<3回目>

<ペットボトルを利用した人形>

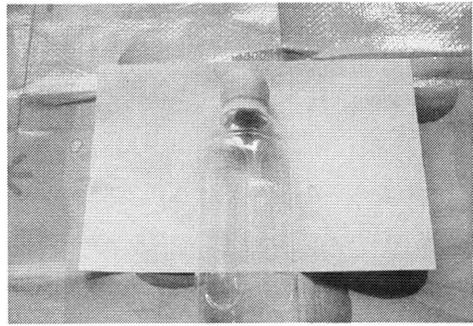
私は、この何ヶ月の間に自分の周りにある物を利用して色々造ってみた。
色々な素材の中で私達が毎日一回ぐらいは触っているペットボトルで何か造れないかと思って考えたのが人形だ。
材料としてはペットボトルと使えない洋服、は切れの生地を利用して造ることにした。

<材料>

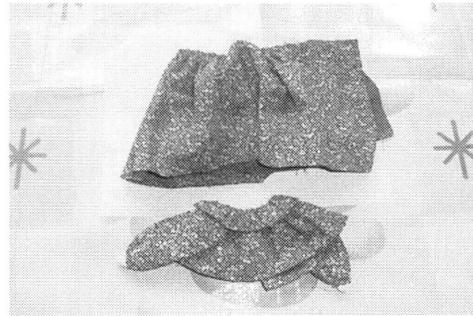
ペットボトル、紙粘土、布、網糸、はり、木工用ボンド、絵の具、サインペン、ボタン



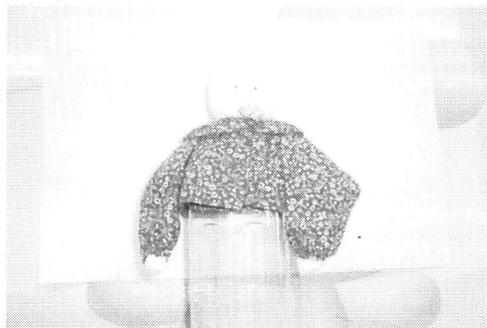
<作り方>



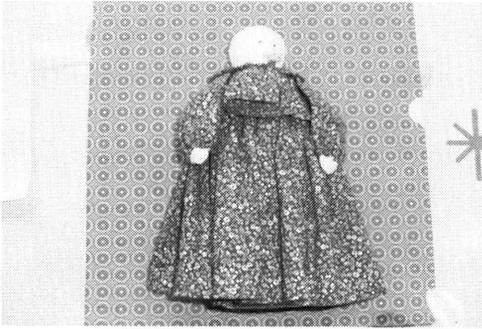
ア、人形の頭は紙粘土をくっつけた後乾かして色を塗った。



イ、洋服は生地を使った。



ウ、胴体に縫い終わった洋服を木工用ボンドで貼りつけた。



エ、スカートも上着と同じように木工用ボンドで貼り付けた。



オ、髪の毛は毛糸で適当に長さを決めて真中にせんもうをあげ木工用ボンドで貼り付けた。



カ、目と口はペンでちょっと…

この人形は大体7時間ぐらいで作りあげた。時間がかかった所は上着を作る時2回ぐらいや

り直しただけでスカートは生地一枚をしぼっただけだった。思ったより時間があまりかからなかったなのでその点を考えてみたらペットボトルが胴体の役目をしてくれたのが長い時間を取らずにできたと思う。

人形を作る時小さいごろ人形の布団を作るために編物をしたことが思い浮かんだ。人形は人間と同じ形をしている。多分そのときは生きていないものだろうけど自分に対して何でもいえる友達であったと思う。その気持ちが大人になった現在自分が作った人形に安らぎを感じた。

これで私は考えた。今の子どもには物があふれつつ、すぐどんな形をしている人形を手に入れるのは簡単だ。けれども実際に子どもに人形をつくりあげる過程を体験させてみたいと思う。あとは子どもたち自身で遊びを発展させていきたい。

自分でつくった人形から創造的または想像力が生まれると思う。

<人形造りの一日目>

今回は、少し高度なものに発展させた技術を盛り込んで、少し難しいペットボトルを胴体にした人形を造らせてみた。

洋服も紙ではなく布地を利用して造りたいと言う子どもの希望を取り入れ、

最初、頭は紙粘土で造らせた。

紙粘土で、頭を作る時は、色々楽しい話しをした。作る時ゾブリの映画の音楽のCDをかけたので、歌が出たらこのアニメの話が弾んだ。

その後、最近映画館でやっているディズニーのニモの話が出た。

めみちゃん ; お姉さん、ニモみた？

私 ; ううん、また見てないね。めみちゃんともえちゃんはみたの？

めみちゃん・もえちゃん ; いいえ、また見てないよ。

めみちゃん ; おもしろそうだね。ぜったいみたい。

私 ; お姉さんも絶対みたいけど、一緒に行く？

めみちゃん ; 本当に？ 行く。

私 ; 今度3人で見に行こうね。

めみちゃん・もえちゃん ; はい。



ア、人形の頭を紙粘土で造っている2人①

3回目なので、だいぶ打ち解けていろいろな話をするようになった。



イ、人形の頭を作っている2人②

めみちゃん ; なかなか丸くならないね。

私 ; 水を少しずつ付けながら丸くしてみたらん…

めみちゃん ; どうして？

私 ; その方がやりやすいと思うよ。

めみちゃん ; あっ、ほんとうだ。やわらかくてやりやすいね。

もえちゃんはほとんど話がなかったので、色々声をかけても、まだ私になれていないのか、首をかしげるだけだった。



ウ、紙粘土をくっつけて、頭を完成させた2人

めみちゃん ; 私の頭大きいね、まずい？

私 ; 人はみんな頭の大きさが違うからいいんだよ…

それに乾いたら少し小さくなるから気にしなくてもいいよ。

めみちゃん ; わかった。



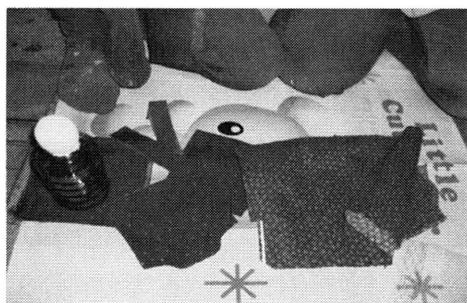
エ、乾いた顔に色を塗っている2人①



オ、乾いた顔に色を塗っている2人②

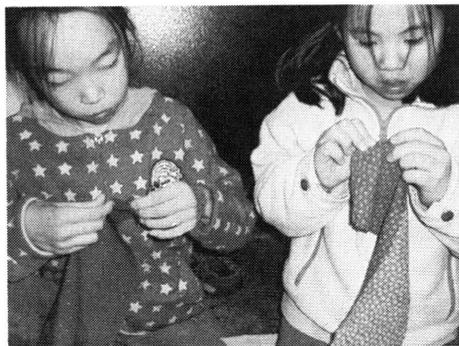
<人形造り二日目>

胴体を作ってから、人形の洋服を作るのに、布地で造るか色紙で造るかを聞いたら、二人とも布地でやりたいという事で用意した布地を、何種類もみせて選ばせた。



カ、二人とも針を使うのは、今回が初めてだと言うことだ。

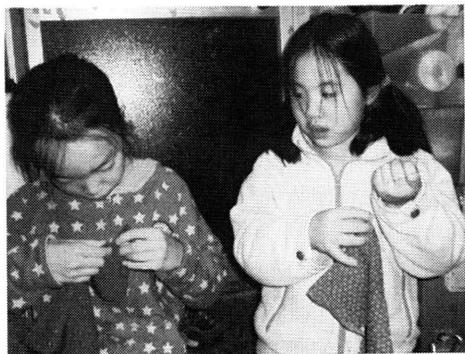
ここでめみちゃんは、左利きだったので、もえちゃんと縫い方を反対にして教えなければならなかった。



キ、夢中になっている二人



ク、二人とも初めて針と糸を使うので緊張をしている様子



ケ、もえちゃんがめみちゃんに気にしている

縫い物をする時めみちゃんは、黙って何もしゃべらなかつた。

私 ; 難しくない? 初めてだから針を手に刺さないように気をつけてね!
めみちゃん ・ もえちゃん ; はい

<めみちゃんのお母さんと話>

めみちゃんのお母さん ; 今まで何回も縫い物など教えてって、聞いたけど、時間がなくてなかなか教える機会がなかったの。私 ; あ。。。。そうだったんですか。

めみちゃんのおかあさん ; 仕事が忙しくて、それに最近子どもも忙しくてね。。3年生になってから習い事が増えて、時間がないのよ。

1年・2年生の時には、よく絵を描いたりしていたから上手だったの。。。。
たまにめみちゃんも自分で言うのよ、お母さん男の人が描けないよ。

私 ; そうか。

<ペットボトルを利用した人形造りの観察及び感想>

子どもの製作の内容が急に難しくなっているのではないかと思いながら、人形造りを始めた。最初は顔を造ることで、紙粘土で丸くしながら、くっつけていく工程だった。次は、子どもたちの希望通りに、針と布地を利用して造った。2

人とも始めて縫い物をするので最初は緊張している様子だったけれども、だんだん早くなり、きれいに縫えているだろうか、自分で確認しながら縫っている様子も見えた。

顔を作る時は、色々会話をしながら展開していたのが、洋服を造る時は何を話かけても、返事さえしてくれなく、すごい集中力をみせて驚いた。

<研究のまとめ>

この一年間、自分で造形製作を体験し、子どもが造形をするのを見学させてもらい、子どもと一緒に、造形活動で今まで自分が経験してなかったことを、手の先から心の中まで、たくさん感じる事ができた。

一年間、造形製作にたずさわって、思ったことは、もし手で物を作ることができなかつたとしたら、どんなことになっていただろう。口や手は、単に、手先や、口先だけが動いているのではなくて、脳と結びついていることを忘れてはならない。

こどもは、手で物をいじり、さわり、こわし、作り、手によって生きていることを、確かめるかのようにじっとしていないものである。生まれてから死ぬまで、この手でどれだけの種類のものに、さわることだろう。見るだけで満足せず、一度はさわってみる。次には手応えを確かめるために、曲げたり、押ししたり、引っ張ったりしてみる。それと同時に、何か新しい形を作ろうとする。手で作るということは生きている証である。

造形は子どもの創造的、造形的な発達に不可欠の「遊び」であり、子どもの最も喜ぶ、動くものの、基礎的な工作である。造形的な経験は、学習における造形表現の基盤になっている。造形的な経験は子どもたちの手

と、土や木や紙、その他、もろもろの材料との出会いから始まる。それは、たとえ物をつくるころまでいかになくても、遊びの中で土や水の性質を知り、木の枝を折ったり曲げたり、紙を丸めたり破ったりする中で、木や紙やその材料の性質を体得すると思う。

遊びの中でこうしたい、ああしたいという要求や願いは、造形表現の中で生かされると思う。その遊びの中に没入している時、子どもたちは夢に向け、その中で新しい要求を生み出し、次の造形活動を促していくということであるだろう。しかも、意欲的に進められると思う。

少ない体験ではあったが、この一年間、実際に子どもたちに接して、造形活動を見たり、自分で行ったりして感じたことは、子どもたちの持っている自分でも気がついていない、潜在能力のすばらしさである。

一例をあげれば、前にも述べたように、ただ危険だという理由だけで、ナイフの使用を禁止したりすることは、手を自由に使いこなす力、すなわち、脳の働きをも阻害する一因にもなりかねない。子どもたちにとって、ナイフのような小さな危険も、造形活動などの中で、体験させ自由に使いこなすことで、逆に大きな危険回避の能力を、育てていけるのではないだろうか。

このようなことで、造形活動は、手を動かし感触を覚え、同時に目で観察し形を把握し、相乗効果として、脳の思考力を高める、その結果として創造力を発展させる、この力はあらゆる分野に適応する、基礎的な力を育てていることになるだろう。

残念ながら、近頃の子どもは、このような基礎的な力を育てる機会が、だんだん少なくなっているのではないだろうか、子どもたちには基礎的な能力を育てる造形活動にもっと触れさせることが望まれると思う。

現在の子どもたちは、受験のための、極めて表面的な、課題をこなす能力は上手になっているかも知れないが、自分で考え、あらゆる状況に自由自在に対応できる能力はあまり持っていない。社会状況が昔とは大きく異なっているの

で、一概にはいえないが、子どもたちにもう一度、かつての子どもたちの持っていた明るい表情を取り戻してあげたいと思う、少なくとも造形活動を行っている時の、自分の世界に熱中している子どもたちを観察していると、すばらしい表情を見せてくれる、子どもたちはだれでも造形活動が好きなのだ、問題はこのような機会を与えることを少なくしてしまった社会状況にあると思われる。

これからは、このように子どもたちに、本当の意味での潜在能力を高めていく造形活動に触れる機会を出来るだけ多く与え、自分で考える能力を持った子どもたちを、育てていかなければならない、これが我々大人に投げかけられた大きな課題ではないだろうか。

<参考文献>

- ・ 「子どもを伸ばす遊びと労働」
佐古田好一・中村 正 編 1985年、
青木書店
- ・ 「子どもの発達と遊び」
メアリー・D・シェリダン著
長瀬又男監訳 同明舎
- ・ 「手仕事を学校へ」
フレネ著 宮ヶ谷徳三訳 黎明書房